

# みずな（ハウス周年）

## 栽培暦

月	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12
作型												
ハウス周年												

## 栽培の特徴とポイント

平均気温 18～20 でよく生育する。25 以上の高温と乾燥条件下では、作柄や品質が不良となりやすい。5～9月播きでは、25～30日で収穫できる。11月播き以降の早春（2～3月）穫りは、抽だいするので行わない。同じハウスで年間5～7回転の作付が可能である。但し、連作障害の回避のため、完熟堆肥や有機質肥料の施用により土づくりに努めるとともに、1回はほうれんそう等、あぶらな科以外の作物を作付けするとよい。また、株張りを良くするため、精度の高い播種機またはシートテープを活用する。収穫作業が遅れないよう計画的な段播きを行う。また、栽培面積が5aを超えた頃から、収穫労力に雇用労力が必要となってくる。

## 品 種

- 京みぞれ（タキイ）：株張りにすぐれ、小株どりに適した周年栽培可能な早生種。生育が旺盛でよく揃う。草姿立性で葉の揃いと株の揃いがよく、収穫、調製しやすい。
- サラダ用京水菜（トキタ）：株張り、株揃いがよく、分けつ旺盛。小株～大株収穫ができる、早生種で周年栽培できる。高温期の小株収穫栽培では、播種後30日位より株張りのある株が収穫できる。
- みずみずしい菜（武蔵野）：周年栽培が可能で小株穫りに適した早生種。株揃いがよく、草姿は立性で収穫、調製しやすい。周年栽培品種であるが、特に耐暑性強く夏播き栽培が最適である。

## 本ば管理

- 耕起  
堆肥や石灰質肥料を施用した後、できるだけ深耕して根が深く張るようにする。
- 施肥  
同じハウスで何度も作付けするので年に1～2回、完熟堆肥を施用し、土づくりに努める。  
土壌pHは6.0～7.0を目標とし、年に1～2回、石灰質資材を施用する。  
高度化成と有機化成は毎作施用する（高度化成のみ施用するのではなく、できるだけ有機化成を施用する）。施肥設計をするにあたり、予め土壌ECを測定し肥料残存量を参考にして高度化成と有機化成の施肥量を決める。  
夏期は窒素成分で10kg以下に減肥するとともに、高度化成の割合を減らす。冬期は有機化成の分解がやや遅いので、高度化成の割合を増やす。

施肥例 (kg / 10 a )

肥料の種類	施用量	成分量			備考
		N	P	K	
完熟堆肥	2,000				・完熟堆肥と苦土石灰は年間施用量。1 ～ 2回に分けて施用する。
苦土石灰	100				
ミドリトップ	100	6.0	6.0	7.0	・ミドリトップとやさい333号は土壌 ECを参考に施用量を調整する。 ・夏期は窒素成分で10kg以下に減肥する
やさい硝加燐	50	6.5	6.5	6.5	
安333号					
計		12.5	12.5	13.5	

3 播種

播種量：50ml/a。平畝とし、畝幅 130cm × 株間 5～8 cm × 条間 15 cmとする。高温期は疎植とし、密植による軟弱徒長を防ぐ。

4 かん水

播種後、均一に十分かん水を行う。出芽後は、通常、収穫までかん水は行わない。

高温期には、播種から収穫 2 週間前までは、乾燥状態が続く場合、かん水するが、収穫 2 週間前からは、かん水は行わない。

病虫害防除

低温期を除き、害虫の発生が非常に多いことから、発生に注意し、早期防除に努める。ハウスの開口部分を防虫ネット(0.8～1mm)で覆うことで、害虫のハウス内への侵入を防ぎ、防除回数を減らすことができる。

キスジノミハムシ：成虫は葉を食べ、1mm くらいの穴をたくさん開ける。幼虫は白色で土中に生息する。播種時に粒剤を土壌混和するとともに、発生を確認したら早期に薬剤防除する。

コナガ、アオムシ：幼虫が葉を食害。発生を確認したら早期に薬剤で防除する。

収穫・調製

草丈 30～35 cm程度で収穫し、根を切り、下葉をとる。収穫後は絶対に水洗いしない。

3～8 株を F G フィルムに 200g になるように入れて、20 束をダンボール 1 箱として出荷する。

特に高温期は、収穫後、早く萎れることから、気温の低い早朝に収穫するとともに、出荷まで保冷庫を利用するなど、鮮度維持に努める。

販売のポイント

株が張って 1 株重が 30～50g になってから収穫すると、単収が確保されるとともに、調製労力が軽減される。但し、収穫が遅れると、草丈が伸びすぎ、F G フィルムから葉先がはみ出ることから、適期収穫に努める。収穫能力(作業者数・収穫期間)から播種面積を逆算し、計画的な播種により安定出荷に努める。